

千年前の韓国の文字と文化財 —郷歌にみる新羅の言葉と仏像—

8世紀の新羅では、「郷歌（ヒャンガ）」と呼ばれる歌が盛んに詠まれていた。郷歌は、漢字の音と意味を借りて新羅の言葉を書き表す「郷札（ヒャンチャル）」という独自の表記法によって記録された。13世紀、高麗の僧・一然是、失われつつあった新羅の物語を集めて『三国遺事』を著した。同書には、背景となる説話とともに14首の郷歌が収録されている。新羅時代に記された郷歌の原資料がほとんど残されていない現在、これらの歌は、7～9世紀頃の新羅の人々の言葉や感情、祈りに触れることのできる、きわめて貴重な文化遺産である。

しかし、郷札は新羅語の語順や文法に基づいて記されているため、長い間、その意味を正確に読み解くことができなかった。本格的な解読の道を開いたのが、1929年、京城帝国大学教授の小倉進平である。その研究は、のちに梁柱東によって大きく発展させられ、郷歌は新羅人の心と生活を伝える韓国古典文学の重要なジャンルとして位置づけられるようになった。郷歌の世界には、仏教の信仰と想像力が色濃く映し出されている。空に二つの太陽が現れたとき、月明師は郷歌を詠んで弥勒仏に祈り、ある子どもが視力を失ったときには、その母親が子どもに郷歌を詠ませ、千手観音に救いを求めた。空に現れた「二つの太陽」とは、いったい何だったのか。新羅の人々はそれをどのように受け止め、どのような姿の弥勒仏や千手観音を見つめながら歌ったのだろうか。

本講演では、実際の郷歌作品を読み解きながら、新羅語の表記と文法の仕組みをわかりやすく紹介する。さらに、現在まで伝わる新羅の仏教文化財を写真資料とともにたどり、千年以上前の新羅の人々が見つめ、祈りを捧げた仏像についても考察する。

【日時】2026年10月17日（土）11:00～13:00

【形式】ハイブリッド形式（対面・オンライン）

※講演は韓国語で行い、日本語資料を配布します。質疑応答は通訳付きです。

参加費無料、ただし10月15日（木）までに**参加登録**が必要です。

下記のウェブフォームまたはメールでの登録をお願いいたします。

開催日までに、事務局よりメールでZoomのURLをお知らせします。

【申請方法】事前参加登録はこちらから→ <https://forms.gle/8BaK6eJimfPaUKhC9>

・対面参加（定員20名）東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム1

※定員になり次第、対面参加の申し込みを締め切ります。

・オンライン参加 ※開催日までに、事務局よりメールでZoomのURLをお知らせします。

お問い合わせ cks@iags-cks.c.u-tokyo.ac.jp（東京大学韓国学研究センター事務局）



講演者紹介

朴宰泯（淑明女子大学校 韓国語文学部教授）

延世大学校で学士号および修士号を、ソウル大学校で博士号を取得した。カトリック関東大学校を経て、現在、淑明女子大学校韓国語文学部教授を務めている。郷歌と高麗歌謡を主な専門分野とし、古典文学作品の成立・伝承の現場に関わるテキストの分析にも取り組んでいる。主な著書に『釈注 高麗歌謡』（2003 年）、『新羅郷歌弁証』（2013 年）、『高麗郷歌弁証』（2013 年）などがある。延世大学校優秀修士学位論文賞（2002 年）、ソウル大学校人文大学最優秀博士学位論文賞（2009 年）、羅孫学術賞（2010 年）、一然学術祭国務総理賞（2010 年）、蘭汀学術賞（2018 年）などを受賞している。



【司会】金志善（東京大学特任准教授、龍谷大学准教授）

主催 東京大学韓国学研究センター

後援 韓国国外所在文化遺産財団